≪論説≫

ウズン・ユヴァの「ヘカトムノス廟」
――発見、整備とその真正性――

阿部　拓児

はじめに

トルコ共和国アイドゥン県ミラース市（古代名ミュラサ）の旧市街地の一角に、ウズン・ユヴァ（Uzun Yuva）と呼ばれる史跡がある。ミラースの旧市街はヒサルバシュの丘に張り付くように広がっているが、丘の南東のふもと、旧市街地の目抜き通りのひとつであるベレディエ・ジャッデシ（Belediye Caddesi、自治体通り）から筋を南に入った、込みいった住宅街のなかにその史跡は位置する。コリントス式の柱頭を持つ長い（uzun）柱の上に、コウノトリの巣（yuva）が作られていることから、地元民たちにこの名で親しまれている（図1、2）。ウズン・ユヴァとは狭く定義すれば、このコリントス式の柱一本を意味する。しかし、より広くは、この柱が立っている基壇（podium／platform）を含めた、用途不明となっていた古代の建造物を指すのである。

図1：ウズン・ユヴァの柱（2005年撮影）

図2：ウズン・ユヴァと基壇（2005年撮影）

ウズン・ユヴァの柱は、高さが8.22メートルあり、その下から3分の1程度の高さのところに、パネル状の装飾が施されている。1675/6年にフランスの考古学者ヤコブ・スポンが同地を訪れた際には、まだこのパネルに刻まれていた文字は目視が可能であった。スポンの旅行記に掲載されている版画によれば、その文面は次の通りである（図3）。

> 「［ミュラサ］市民はメナンドロス――エウテュデモスの孫にして、ウリアデスの息子――、故国の善行者［エウエルゲテス］にして善行者たちの子孫を顕彰する。」

ウズン・ユヴァとはすなわち、都市にたいして何らかの善行をなしたメナンドロス（一族）にたいし、彼らの恩恵に報いるためにミュラサ市民が建てた顕彰モニュメントの一部であったのである。したがって、現在はコウノトリの巣が築かれている柱頭部分にも、かつてはメナンドロスの彫像が置かれていた（柱は彫像台座（スタチュー・ベース）として機能していた）との推測が導き出される。このことから、ウズン・ユヴァの別名として、「メナンドロスの柱（Menandros

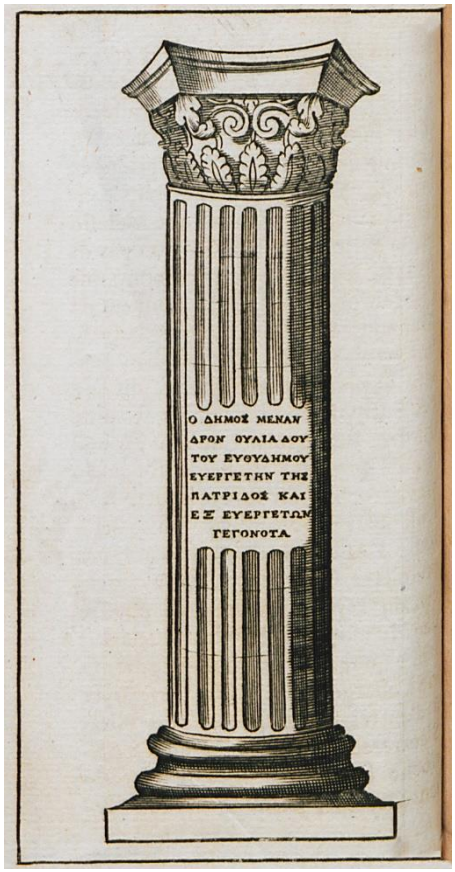

図 3：スポンの旅行記に掲載されているメナンドロスの柱（J. Spon and G. Wheler, George, *Voyage d'Italie, de Dalmatie, de Grece, et du Levant: fait aux années 1675. & 1676*, Amsterdam, 1679, p. 274）

Column）」との呼び名も用いられるようになった（以下、柱のみを指す場合は、メナンドロスの柱と呼び、基壇部も含めた遺構全体を指す場合にウズン・ユヴァを用いる）。

ところが、この単純な事実は、長らく忘れさられていた。というのも、1838 年にイギリス人のチャールズ・フェローズがミラースを訪れた時点以前に、この碑文は消滅していたからである。メナンドロスの柱が立つ一帯（ウズン・ユヴァの遺構の地表面）は当時、住宅地として利用されており、たびたび柱を見学しに訪れる外国人観光客に嫌気がさした住民の一人が、のみで文字を削り取ってしまったのだという[1]。これによりメナンドロスの柱が顕彰モニュメントの一部であったこと、かつてはそこに碑文が掲げられていたという事実すら忘却され、代わりに柱とそれの立つ基壇部が一体のものとして理解されていくようになったのである[2]。

[1] C. Fellows (1840), *An Account of Discoveries in Lycia: Being a Journal Kept during a Second Excursion in Asia Minor*, London, p. 70.

[2] ウズン・ユヴァの略史については、F. Rumscheid (2010), 'Maussollos and the "Uzun Yuva" in Mylasa: An Unfinished Proto-Maussolleion at the Heart of a New Urban Centre?' in R. van Bremen and M. Carbon (eds.), *Hellenistic Karia: Proceedings of the First International Conference on Hellenistic Karia*, Bordeaux, pp. 69-102. たとえば後述のビーンは、「そのパネルがきちんと平坦に削られたことはなさそうだし、けっして文字が刻まれることがなかったことは明らかだ」と述べている。

1. ウズン・ユヴァ＝神殿説

メナンドロスの柱の本来の意味が忘れ去られていくなかで、ウズン・ユヴァを神殿跡と見なす説が有力となっていった。たとえば、アナトリアの考古遺跡案内書を書いたG・E・ビーンは、この神殿がゼウス・カリオス神に捧げられたものであったと紹介している[3]。すでにビーンには顕彰モニュメントとしての記憶は完全に失われており、柱に施されたパネル状の装飾部分には本来、神殿建立のために寄進した人物の名が刻まれる予定であったが、けっきょくそれがなされることはなかったのだとの理解がなされている。ミラースから10キロメートル北に位置するエウロモスのゼウス神殿では、神殿の周りを囲む柱のそれぞれに寄進者の名が記録されており、これがビーンの、ウズン・ユヴァを神殿と見なす根拠のひとつともなっている（図 4、5）。それでは、ゼウス・カリオスとは、どのような神格なのであろうか。

図 4：エウロモスのゼウス神殿

図 5：寄進者の名前が刻まれたパネル装飾（同神殿）

前 1 世紀の地理学者ストラボンは、ミュラサ一円には、ゼウス・ラブラウンドス、ゼウス・オソゴア、ゼウス・カリオスの 3 つのゼウスの聖域があると紹介している（14. 2. 23）。このうち、ゼウス・ラブラウンドスの聖域であるラブラウンダは、ミラース市内から北へ15キロメートルの山中に位置し、現在でもじゅうぶんに見ごたえのある遺跡として残っている（図 6）。一方、ストラボンによればゼウス・オソゴアとゼウス・カリオスの神殿はミュラサ市内に築かれていたというが、古代の都市域が現代の市街地に覆われているゆえ、場所の同定には至っていない。

ストラボンは、ゼウス・ラブラウンドスとゼウス・オソゴアがミュラサ限定の信仰であった一方で、ゼウス・カリオスの聖域はすべてのカリア人に共通して開かれていたとも述

[3] G.E. Bean (1980), *Turkey beyond the Maeander*, 2nd ed., London, pp. 20-22.

べている[4]。また、この地域出身であった前 5 世紀の歴史家ヘロドトスも、次のように記している。

図 6：ラブラウンダ聖域のゼウス・ラブラウンドス神殿跡

> 「カリア人についてクレタ人の伝えるところは右のようであるが、カリア人自身はこの説には不賛成で、自分たちは土着の大陸人であり、昔からずっと今の名称を用いてきているのだと信じている。彼らがその証拠として挙げるのは、ミュラサにある「カリアのゼウス（ゼウス・カリオス）」の古い神殿で、この神殿には（近隣の）ミュシア人もリュディア人も、ともにカリア人と兄弟関係の民族というので参与を許されている。彼らの伝承によればリュドスとミュソスはカルの兄弟だというのだからである。それでこの二民族には参与が許されているが、それ以外の民族に属するものは、たとえカリア人と同じ言語を話すものでも、参与が許されない。」（1. 171. 松平千秋訳を一部改変）

すなわち、ゼウス・カリオス信仰とは、カリア語（カリア人と同じ言語）とならんで、カリア人のアイデンティティの基礎となっていたというのである。なお、ヘロドトスが付けくわえて述べる、カリア語を話しながらもゼウス・カリオス信仰に参与できない人々に

[4] 実際には、ゼウス・ラブラウンダの信仰は前 4 世紀のヘカトムノス朝下で大いに発展し、ミュラサ以外でも広く信仰されていた。阿部拓児（2015）『ペルシア帝国と小アジア――ヘレニズム以前の社会と文化』京都大学学術出版会、154 頁。

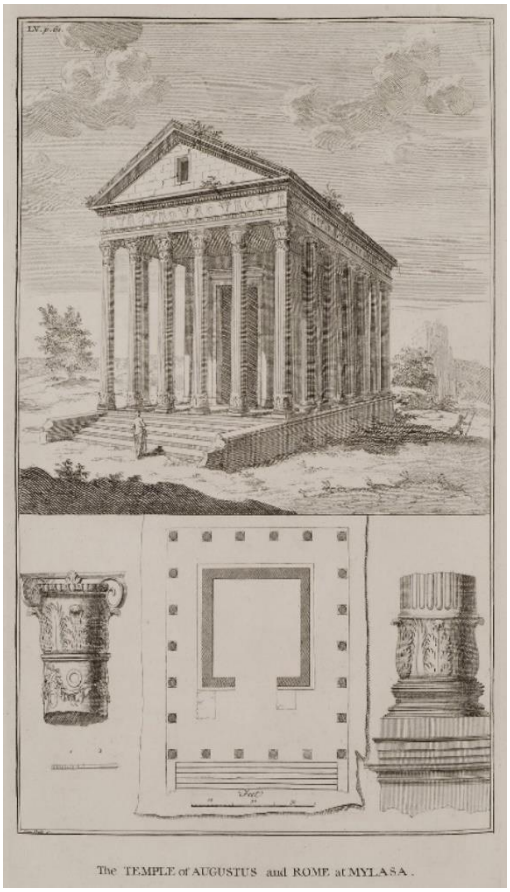

図 7：18 世紀の旅行記に掲載されたミュラサのアウグストゥス神殿（R. Pococke, *A Description of the East, and Some Other Countries*, London, 1745, table 61）

ついて、筆者は以前、カウノス人ではないかとの推測を示した。というのも、カウノスからはカリア語碑文が数点出土しているにもかかわらず、ヘロドトスによれば、カウノス人はカウノス外の信仰を排除するとも伝えられているからである[5]。

なお、前 4 世紀に在地の王家でありながらも、アカイメネス朝ペルシア帝国の総督に就任したヘカトムノス家は、このゼウス・カリオス信仰ではなく、ゼウス・ラブラウンドス信仰に深く関与していき、ラブラウンダの聖域を大いに発展させたことで知られる。

ウズン・ユヴァはこのほかにも、ローマ時代のアウグストゥス神殿跡との説も出されていた（図 7）[6]。しかし、いずれにせよウズン・ユヴァを何らかの神殿だと推測する説では、メナンドロスの柱は神殿の外周に立てられた柱の 1 本だと見なされたのである。

2. ウズン・ユヴァ＝墓廟説

ウズン・ユヴァは神殿であるとの説が有力視されるなか、ドイツの考古学者フランク・ルムシャイトは、2006 年にオクスフォードで開催された古代カリア史にかんする国際学会にて、それが墓廟であったとの説を提案した[7]。ルムシャイトがこのような見解にいたった根拠は多岐におよぶが、以下ではその要点を述べよう。

[5] 阿部（2015）、150 頁。
[6] ミラースのアウグストゥス神殿は、旅行記の記録から 18 世紀中ごろまで現存を確認できるが、それ以降に取り壊され、現在は跡形がなくなっている。ウズン・ユヴァをアウグストゥス神殿とする推測は、両モニュメントの記憶が失われていたことに起因する。
[7] Rumscheid (2010).

まず、ルムシャイトは、メナンドロスの柱が本来顕彰モニュメントの一部であったとの事実をよみがえらせ、柱とそれが立つ基壇部（podium／platform）はまったく別の時代に属し、異なる目的のために建てられたものであることを確認する。そのうえで、ウズン・ユヴァとそれが置かれた段状地（テラス）の位置関係に着目する。先述のとおり、ウズン・ユヴァはヒサルバシュの丘の山裾に位置するが、そこは本来傾斜地であって、大型の建造物を建てるには、地面を水平方向に整備する必要があった。そこで、土地の低い場所には擁壁を築き、土盛りをすることによって、平らに均された区画＝テラスが作り出されたのである。たとえば、ベレディエ・ジャッデシに接する方角では、このテラスの北東角を固める擁壁が良好な状態で保存されているが、ルムシャイトはこれらの四隅を確定することによって、テラス全体の範囲を画定したのである（図 8）。このように整備されたテラスの上に大型の建造物が配置された事例としては、コス島のアスクレピオス神域が有名である（図 9、10）。しかし、アスクレピオス神域の場合、神殿はテラスの中央に配置されているのにたいし、ウズン・ユヴァの遺構はテラスの西半分に偏って配置されている。また、神殿ならば当然有していたであろう、テラスへの入り口となる参詣道の階段も、ウズン・ユヴァのテラスには見当たらない。以上のことから、ルムシャイトは、ウズン・ユヴァを神殿跡だと見なす説を否定した。

図 8 : ウズン・ユヴァのテラスの擁壁（北東角）（2014 年撮影）

図 9 : コス島のテラスとアスクレピオスの神域（2014 年撮影）

図 10 : コス島のテラスとアスクレピオスの神域（2014 年撮影）

神殿でないとするならば、それではウズン・ユヴァは何の目的で建てられたのか。ルムシャイトが注目したのがマウソロス廟である。カリアの王にしてペルシア帝国の総督に就

図 11：ボドルムのマウソロス廟跡

任したヘカトムノスの後を継いだ長男、マウソロスは、古都ミュラサから都を移し、沿岸の都市ハリカルナッソス（現ボドルム）を開発した。そこに建てさせた自らの墓が、マウソロス廟である（図 11）。このマウソロス廟も長方形に仕切られた区画の、その中心からずれた位置に配置されている。また、ウズン・ユヴァから出土した石材に施されたレリーフ文様が、マウソロス廟のそれと類似していることも、建設目的・時期を推定する重要な手がかりとされた。以上のような考証を経て、ウズン・ユヴァは、マウソロスがミュラサからハリカルナッソスに遷都する以前に建てた、マウソロス廟に先行する墓廟だったとの仮説を提示するに至ったのである。

ルムシャイトがこの説を発表した 2006 年の段階では、ウズン・ユヴァの区画の大部分にはオスマン朝期以来の住宅が建てられており、実際の発掘には着手されていなかった。したがって、ルムシャイトも地表面の遺構踏査を頼りに、このような結論に至ったのである。

3. ウズン・ユヴァ＝ヘカトムノス廟説

ところが、2010 年に事態が大きく動いた。この年、イギリスのオークション会社であるサザビーズとボナムズの 2 社に、エディンバラ在住のトルコ人カフェ・オーナー、ムラート・アクサカッリ（Murat Aksakalli）から、あるアイテムの出品が持ちかけられた。アクサカッリがオークションにかけようとした品とは、黄金製の冠（ディアデム）で、彼はこれを祖父から相続したものだと主張した。これを不審に思ったスコットランド警察が、バイヤーになりすましアクサカッリと接触した結果、くだんのアイテムはトルコから不法に持ち出されたものであることが明らかとなった。スコットランド警察の取り調べによれば、アクサカッリ一味は 2008 年、ウズン・ユヴァの上に廃屋として残されていた民家に忍び込み、その床下を掘って墓にたどりつき、上記のディアデムを盗み出したのだという[8]。

この事件がきっかけとなり、ウズン・ユヴァの正規の発掘が急ピッチで進められた。まずは、ウズン・ユヴァの上にあった廃屋をすべて取り除くところから始められた。発掘の結果、基壇中央からは墓が発見され、発掘前に出されたルムシャイトの説が「なかば」正しかったことが証明された[9]。墓は羨道、墓室、耐荷重室の三つの要素から構成されていた。

[8] Hürriyet Daily News, December 30 2017.（http://www.hurriyetdailynews.com/golden-crown-of-hecatomnus-to-be-returned-124956　2019 年 2 月 12 日閲覧確認）

[9] ルムシャイト説によれば、ウズン・ユヴァはマウソロスによって工事が着手されたものの、ボドルムへ

図 12：公開された「ヘカトムノス廟」跡

図 13：公開された「ヘカトムノス廟」跡

羨道は約 8 メートルの距離があり、幅は 2 メートル、高さ 3 メートルで、入口は 5 トンの一枚岩で閉じられていた。羨道の先には墓室があり、その上には墓室への負荷を減らすように、山型の空間を持つ耐荷重室（Load-bearing Room）が設けられていた。墓室のなかには石棺（サルコファゴス）が南北軸に置かれていた。石棺のサイズは 2.78×2.12×1.55m、蓋は切妻型で、石棺の周囲には、葬送の宴会が 2 面に、野獣狩りが 1 面、そして残るもう 1 面に椅子に座る夫婦（王と王妃）の姿が浮き彫りされていた。また、ヴォールト型の墓室の壁面には、王と王妃、そしてその家族と思しき人物像のフレスコ画が描かれていた。これら石棺と墓室壁に描かれた家族の肖像が決め手となり、この墓の持ち主は、ミュラサ出身で、前 4 世紀初頭にこの地を治めるペルシア帝国総督に任命されたヘカトムノスであるとの推定がなされた。すなわち、ウズン・ユヴァはハリカルナッソスのマウソロス廟に先行する大型墓廟であると判明したのである。

この大発見を受け、2012 年にウズン・ユヴァは「ヘカトムノス廟とその聖域（Mausoleum and Sacred area of Hecatomnus）」として、ユネスコ世界文化遺産の暫定リストに登録された[10]。また、遺跡発掘以降、同地は遺跡展示場および博物館として整備され[11]、2018 年に一般公開された（図 12、13）。その前年の末には、遺跡発見のきっかけとなったエディンバラのディアデムも、トルコに返還されることが決まった[12]。

しかし、ウズン・ユヴァがヘカトムノス廟であったとする考えには、考古学者の間でも意見が割れている。じつは、先に記した 2006 年の国際学会の場で、フランスの考古学者オリヴィエ・アンリーは、ヘカトムノスの墓として、ウズン・ユヴァ以外の可能性を提案し

の遷都にともなって、完成前に放棄されたという。しかし、発掘によって、ウズン・ユヴァは実際に墓として使用されていたことが明らかとなった。

[10] https://whc.unesco.org/en/tentativelists/5729/　2019 年 2 月 12 日閲覧確認。

[11] ウズン・ユヴァの整備過程については、A. Frascari and A. Mancuso (2015), ‘Milas, Turkey: Cancelling the Town to Extract the Monument?: The Case of the Hekatomnos’ Tomb’, in G. Verdiani, P. Cornell and P. Rodriguez-Navarro (eds.), *Architecture, Archaeology and Contemporary City Planning “State of Knowledge in the Digital Age”*, Valencia, pp. 69-77. 整備過程においては、とりわけインターネットを通じての情報発信の乏しさが指摘されているが、これはひとつには、さらなる盗掘を未然に防止するとの意図があると考えられる。

[12] Hürriyet Daily News, December 30 2017.（http://www.hurriyetdailynews.com/golden-crown-of-hecatomnus-to-be-returned-124956　2019 年 2 月 12 日閲覧確認）

ていた。アンリーによれば、それは地元民からベルベル・イニ（Berber İni）、もしくはベルベル・ヤターウ（Berber Yatağı）と呼ばれる墓で、ベチン・カレの西方に位置する岩窟墓である。この場所は、ボドルムからミラースに至る道の右手にあり、古代よりミュラサ領の境界にあたるものと考えられる。岩窟墓も特徴的で、崖面は神殿型に彫られているものの、この神殿部分は墓室をともなっておらず、墓室は神殿部の下方に別に掘られている。しかも、南西アナトリアの岩窟墓では羨道なしに直接墓室につながるのが一般的であるにもかかわらず、ベルベル・イニでは短い羨道の奥に墓室が備わっている。このような特殊な構造から、アンリーは、これが王家のためのもの、とりわけヘカトムノスの墓だったと推測した[13]。アンリーは、ウズン・ユヴァの「ヘカトムノス廟」発見後も、とくに自身の考えを変更していない[14]。

また、ウズン・ユヴァを最初に墓廟だと言い当てたルムシャイト自身も、これをヘカトムノス廟とするのには、慎重な態度を示している。彼は、所属大学のウェブサイト‘Mylasa in Karien’にて、ウズン・ユヴァはヘカトムノス期ではなく、マウソロス期に属すものだとの見解をあらためて示している[15]。筆者自身も、ウズン・ユヴァをヘカトムノス廟だと同定するには、決定的な証拠が足りないのではないかと考えている。すなわち、ヘカトムノス以外の、ヘカトムノス朝の人物、たとえばマウソロスの弟イドリエウスの墓廟の可能性はないのだろうか。というのも、イドリエウスがラブラウンダに奉納した碑文には、「ミュラサの人イドリエウス」と記されており、ハリカルナッソスの開発に力を傾注した兄マウソロスとは異なり、イドリエウスは旧都ミュラサにたいする思い入れが強いようにも読み取れるからである[16]。いずれにせよ、ウズン・ユヴァの遺構をヘカトムノス廟であると断定したことが、この新発見をよりいっそうセンセーショナルにしたことは間違いなかろう。

本稿は、科学研究費基盤研究（C）「遺跡・遺構からみるアナトリア都市文化の通時的分析」（代表：阿部拓児、研究課題番号 17K02025）による研究成果の一部である。

写真提供：図 1、2、8-10－筆者、図 4-6、11－守田正志、図 12、13－田中英資（撮影時期が記されていない写真のうち、図 6、11 は 2017 年 8 月、そのほかは 2018 年 9 月に撮影）

（京都府立大学准教授）

[13] O. Henry (2010), ‘Hekatomnos, Persian Satrap or Greek Dynast?: The Tomb at Berber İni’, in R. van Bremen and M. Carbon (eds.), *Hellenistic Karia: Proceedings of the First International Conference on Hellenistic Karia*, Bordeaux, pp. 103-121.
[14] O. Henry (2013), ‘A Tribute to the Ionian Renaissance’, *Varia Anatolica* 28, pp. 81-90.
[15] https://www.ai.uni-bonn.de/lehre-und-forschung/mylasa　2019 年 2 月 12 日閲覧確認。
[16] 阿部（2015）、181 頁。